

特別優秀賞

小さな元気

静岡県 入野小学校 五年 氏原琉偉

ぼくの家は、ゆるやかな坂の途中にあります。歩くのはそんなに大変ではありませんが、自転車やお年寄りの人は、上り坂をふうふう言って途中で休みながら登ります。

夏の暑い日、ぼくが下に歩いていくと、日傘をさしてスーパーの買い物袋を重そうに持ったおばあさんが、ゆっくりと登ってきました。すれ違うときに見たら、おばあさんは汗びっしょりで、とても苦しそうでした。

そのとき、思い出しました。今朝のテレビで熱中症に注意しましょうと、呼びかけていたことを。

「おばあさん、ぼくの水筒のお茶飲みませんか。たった今、お母さんが入れてくれたので。」

「いいです、いいです。」

おばあさんはそう言って、自分の顔の前で手を左右にふりました。いつものぼくならそこでやめるのですが、おばあさんの赤い顔がふつと違うような気がして、もう一度くり返しました。

「おばあさん、ぼくの水筒のお茶飲みませんか。」

おばあさんは、一息ついたように「フー」と言って、ハンカチを出して汗をふきました。

「ぼっちゃん、ありがとう。いただくねー。」

ぼっちゃんなんて言われて、なんだか恥ずかしかかったけれど、ぼくは急いで水筒のふたを開けて「どうぞ」と差し出しました。

おばあさんののどが「ゴクンゴクン」と音をたてています。おばあさんの顔が、ぼくのおばあさんのようにやさしく見えます。

「あー、よかった。」

ぼくはちょっと軽くなった水筒を、おばあさんから受け取りました。

お盆の休みの日、いとこたちと蒲郡のラグーナに遊びに行く予定だったのに、お天気が悪くてだめになりました。お昼ご飯を食べたあと、バスケットを外でしていたら、あのおばあさんがぼくと同じくらいの男の子と家の前を通りました。手をつないでとても元気そうで、ニコニコしていました。この間よりずっと若く見えました。

「田舎から孫が遊びにきたのよ。この間は、ありがとう。」

ぼくをみつけて、おばあさんは言いました。

あ～、あのときは暑いだけでなく、きっとさびしかったんだろうな。と思いました。おばあさんに、少しだけだけど元気をあげたのは、ぼくだ、ヤッター。

二人は手をふりながら軽やかな足取りで、坂を下って行きました。

雲の間から、青い空がのぞいていました。